

亜麻を使った 特産品作りへの挑戦



当別町 4H クラブ

農業の未来を考え、若い農業後継者で構成している4Hクラブ。

きれいな畑で作物を育てようとほ場周辺のごみ拾い活動や、農作物への研究を重ねるなど農業経営をテーマに活動をしています。

昨年は、かつて当別で大規模に栽培され、40年前に姿を消した亜麻を復活させて特産品を作ろうと試行錯誤を重ねました。

亜麻で特産品を作ろうと思ったきっかけは

当別の名産は？と聞かれたときに何も答えられないことが悔しくて、当別といえばこれがあるとPRできるものはないかと考え、亜麻を使って特産品を作ろうと立ち上がりました。

それに、亜麻を使った加工品を通して当別で生産している麦や豆も一緒に売り出していくことができれば、波及効果で当別産の知名度が上がってくると考えました。

亜麻は、最近種から取れる油が体にいいことが発見されて注目を浴びるようになりましたが、40年前に栽培されなくなってからは、試験場でも栽培方法を検討していないので、ゼロからのスタートでした。でも、誰も手をつけていないから逆に手を上げやすいとも考えましたね。

亜麻の特徴を活かして加工品を作ろうと考えたのですね

「ごまの様な形と味でアーモンドのようなほのかないい香りがする」この亜麻の特徴を活かして洋菓子に合わせると、美味しいお菓子ができるのではないかと考えました。

最初は、亜麻プロジェクトに関わるみんなで亜麻クッキーに挑戦したのですが、自分たちのノウハウだけでは上手くいきませんでした。そこで、立ち上げたのが「特産品プロジェクト～亜麻～い出会いを求めて」の取り組みです。製品開発の第一歩として、北海道の食材について研究している天使大学のサークル「北の食物研究所」に、お菓子作りへのアイデアをもらうことにしました。

7月には、試作品作りのために亜麻と当別の農産物を知ってもらおうと交流会を開催し、9月には学生から提案された試作品の試食

会を実施しました。亜麻だんご、シフォンケーキなど5品を試食した結果、グリッシーニというイタリア風のお菓子が一番美味しかったです。この試作品作りを通して亜麻が食品になる可能性がみえたかなと思います。

製品化するには課題もあるのですね

現在は、亜麻のサプリメントを加工している会社にお菓子の製品化に向けて提案しようとしている段階です。4Hクラブだけでは、人手の関係もあり加工から販売まで全てを手がけることは困難なので、商品化をするにはもっと多くの方の協力が必要です。

亜麻は、病気や寒さに強く、北国向けの作物ですし、花もきれいなので、観光にも結び付けやすいと思います。当別の特産品として亜麻を発信できるようになればと思います。

文化活動・交流の拠点

ふれあい倉庫「赤れんが6号」

■ 年末年始のお知らせ

ふれあい倉庫休館日

19年12月30日(日)～20年1月7日(月)

物販コーナー・TOMOTO休業日

19年12月28日(金)～20年1月9日(水)
1月10日(木)より、皆様のお越しをお待ち
しています

★ふれあい倉庫よくあるQ&A★

Q 誰でも使用できるのですか

個人でも団体でも使用できます。使用料は使う場所や時間、使用内容によって異なります。また、文化協会に加盟している場合や町の後援がある事業は減免措置があります。

育成会や子ども会、少年団活動で使用する場合は、全額免除になります。

Q 映像を写したいのですが

カルチャーホールにはプロジェクターを据え付けています。DVDやパソコンを使った映像を200インチで写すことができます。

Q 音響や照明の使い方が分からないのですが

音響や照明は、使用する団体で操作をしていただきますが、事前に担当職員にご相談ください。

Q 冬はどんなものを販売しているのですか

これまで通りハム・ソーセージやいもだんご汁などの加工品のほか、スウェーデンガラスやふくろうグッズなどを販売しています。

また、宇和島市のみかんや岩出山のかりんとうなど、交流都市の特産品も人気があります。

「TOMOTO-友と-」では、とりたま食堂「こっこ家」のこっこラーメンを水、金、日曜日に味わうことができます。

▼問合せ ふれあい倉庫 (☎27-6600)
商工課 (☎23-3129)

続

町長の日記

平成13年、町長に就任した直後、広報担当から何か書くように勧められた時、私は確かに心の中で「自分はこれから今まで歩いた事のない道を行くのだ」と思いました。

人は旅をする時、日記を書くように私もこれを契機に日記を書いてみようと思い、4年6ヶ月54回続けましたが、だんだん職務が増えて負担になり広報編集見直しを機に書くのを止めたのですが、先日、とある所で「町長の日記、やっぱり復活されてはどうですか？」と尋ねられた。

目の不自由な人達にボランティアで何年も広報を読み聞かせて下さっている方のお話なので真剣に考えて「町長の日記」を再び書く事にしました。

今、この町に「声の広報」を待っておられる目の不自由な方と寝たきりの方などもおられますが、当別町には、介護を必要とする人が650人以上はいる。その内老人施設などに入っておられる人は160人くらいいる。

実は、私の母も妻の父も共に、今年92歳になり今は老人介護の施設でお世話になっております。

「声の広報」を自宅で待っている人のお気持ちが今の私には、とても判る気がしたのです。

私はつい一、二年前までは自分の親の世話を他人様をお願いするなどは考えもしなかったので、夜中にふっと目が醒めた時などは、先ず二人の親の事が頭をよぎります。

“町民の為”にと云っている自分が自分の親を直接世話をしていないと思うと自負心が揺らぐのですが、妻の方がもっと心が揺れるはずなのに彼女は私の前では常に表情を変えないでいる。

今年の正月は、女性がまだ日記と云う物を書かなかった時代の「土佐日記」、夢と現実のはざままで漂った日本語の美しい「更級日記」、道網の母が美貌と才能に恵まれながら続いた21年間の苦闘の「蜻蛉日記」など、平安時代の日記文学を読み返して封建社会とはいえ藩政の苦しさを幕府のせいには出来なかった領主達の苦悩を想像して町政に没頭する年にしたい。

町別町長衆亭後考